



るいろうるるし 蟻色漆【名】蟻色塗に用

ふる漆。生漆(ナシ)に、少しも油類を加へずして精製し、黒色を帯びしむるために、適量の水酸化鐵を加へたるもの。これを塗りたるままにては艶消(マツシキ)に似、磨ぎて始めて光澤を發す。

ろいろすみ 蟻色炭【名】漆塗の面を研磨するに用ふる木炭。百日紅(サザン)の材を燒きて製したもの、炭層緻密なるが故に、質用せらる。百日紅(サザン)。材を焼きて製したもの、炭層緻密なるが故に、質用せらる。百日紅(サザン)。

ろいろぬり 蟻色塗【名】蟻色漆にて塗り、乾燥後、その上を角粉(コクフウ)及び蟻色炭にて研ぎて、光澤を出せるもの。花塗(ハナツ)に比して、色澤艶麗、雅致に富むを以て、美術的製品に適用す。ろいろぬり。

ろう妻【名】天二十八宿の一・西方にあるもの。たたらぼし。婬宿。和爾爾(葉)妻、タラボシ・ロウ。

ろう樓【名】數層に重ねて高く造りたる家。たかどの。空壁樓は、ただ、櫻の花の中に包まれたり。やぐら。ものみやぐら。樓櫓。

ろう籠【名】左傳の僖公二十六年の條に「耳不<sup>レ</sup>聽五聲之和曰<sup>レ</sup>聾」とあり。つる言のおはします籠の中に「謡曲(籠祇王)囚人を見れば、未だ若き人なり。……籠を開き、夜に紛れ落す」。

ろう聰【名】論語の泰伯篇に「子欲居九夷<sup>レ</sup>或曰、陋如<sup>レ</sup>之何<sup>レ</sup>とあり」いやしきこと。卑陋。

ろう漏【名】■ろうこく漏刻に同じ。ろう陋【名】地支那の隴山の西方の地、即ち今のが甘肃省の邊。今も甘肃省の雅稱を隴省といふ。

ろう隣【名】蜀を望む【句】蜀は今の四川省。故に、今も、四川省の雅稱を蜀省といふ。■後漢書の獻帝紀に「司馬懿言<sup>レ</sup>於曹操一日、今克<sup>レ</sup>漢中<sup>レ</sup>益州震動。進<sup>レ</sup>兵臨<sup>レ</sup>之勢必瓦解。操曰、人革<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>足既得<sup>レ</sup>隴復望<sup>レ</sup>蜀」とあるに

本づく。同書の岑彭傳にも、「得」の字

を「平」として出せり。支那三國の時、

よ<sup>レ</sup>諸曲の一。祇王といふ白拍子、入牢

司馬懿、魏主曹操のために、蜀軍と戦ひ

て、その漢中(今陝西<sup>レ</sup>省漢中府)

を取<sup>レ</sup>り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあ 聾啞【名】聾(レン)と啞(マ)と。

ろうあがくかう 聾啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施す

學校。まうあがくかう(聰啞學校)參照。

「と

学校

を

取り、なほ進みて益州(蜀の首都)

地を取らんと欲せし故事。■ばうしょ

く(望蜀)を見よ。

ろうあがくかう 聰啞學校【名】聾者と

聰者とのみを集めて、特別の教育を施



るおま【英 Roast の略】[名] ■西洋料理にて、鳥獸の肉を蒸焼したるもの。■『英 Surois』前項の料理に適する肉なるより、『牛』牛などの脊筋の兩側に接せる、赤き色したる良肉。ヒレ肉に次ぎて貴ばれ、内側なるを内ロオス、外側なるを外ロオスと呼ぶ。くらした。  
るおま【英 Roast pork】[名] 西洋料理にて、蒸焼したる豚肉。  
るおま【英 Roman】[名][地] ■伊太利國の首府。■西洋の古代の國。前項の羅馬の地を中心として起り、希臘の後を承けて興隆し、版圖は歐羅巴の南半、阿弗利加の北部、亞細亞の西南部等に及ぶに至れり。建國は西暦前七五三年(我國神武天皇の即位より九十餘年前)に在りと稱せられ、紀元後、初は王政なりしが、後、共和政となり、更に帝國となる。三九五年、東羅馬・西羅馬の兩帝國に分裂し、四七六年前者先づ亡び、後者は、一四五三年に至りて滅亡す。  
羅馬は一日にして建てられたるに非ず【句】『獨 Rom ist nicht in einem Tage erbaut』事は短日月にして成就するものに非ざる讐。〔証説〕  
るおま【英 Roman Catholic Church】[名][基] ろおま(羅馬教會)に同じ。  
るおま【英 Roman Catholic Church】[名][植] 菊科に屬する多年生の草。葉は二回羽状複葉にして、細裂又は線形をなし、強き香氣を有す。花は夏秋の交頭狀花序に排列して開き、周圍の舌狀花は白色、中部の筒狀花は黃色を呈す。原產地は西部歐

羅巴。藥用に供す。  
うおまかみつれくわ 羅馬加密兒列花  
【名】前條の植物の花を乾燥したるもの。  
發汗驅風の薬劑として、熱湯に浸して飲  
用すること、カミツレ花に同じく、専ら  
英・佛兩國の民間薬に屬す。  
うおまかみるれくわ 羅馬加密兒列花  
【名】<sup>（「おまかみつれ（羅馬加密兒列）」と同じ）</sup>  
うおまかみつれ（羅馬加密兒列）に同じ。  
うおまかみるれくわ 羅馬加密兒列花  
【名】<sup>（「おまかみつれ（羅馬加密兒列花）」と同じ）</sup>  
うおまかみつれ（羅馬加密兒列花）に  
同じ。  
うおまきうけう 羅馬舊教 【名】[基] 次  
うおまけう 羅馬教 (英 Roman Catholic  
Church) 【名】[基] 基督教の三大區分の  
一。羅馬法王を元首として、その統治に  
服し、中央政府を伊太利國羅馬に置く。西  
羅馬帝國滅亡後、約五百八年を経て、西曆  
一〇五年、基督敎會の分裂に際し、東方の  
希臘敎會に對して、歐洲西部の敎會を總  
括し、東羅馬帝國(一名、希臘帝國)の支配  
を受けざるに至りて成立す。基督教の他  
の二派なる希臘敎及び新敎に比して、信  
者最も多し。羅馬敎會。羅馬舊教。加特  
力敎會。羅典敎會。天主敎。  
うおまけうくわい 羅馬敎會 【名】[基]  
前條に同じ。  
うおまじ 羅馬字 (英 Roman character)  
【名】■「伊太利國羅馬より發源せりとい  
ふによりていふ」英國・佛國等、主として  
羅馬敎及び新敎を奉ずる多數の歐米諸  
國・諸民族の間に使用せらるる文字。A,B  
C,D,E,F,Gなど。獨逸及び奧大利には、  
E,G,I,A,B,C,D,Fなどの如き異體のものも廣く  
行はれると、系統は同じくこれに屬す。  
■うおまづづり (羅馬字綴の略)。

されりり ようや ものんひがま はへあひほ のねめには とてつちた そせすしる 二けきよか おえついあ

馬字會の用語の文語體なりしに對して、  
口語體を採用し、一段の進歩を見るに至  
りしが、綴字に於て從來のヘボン氏に對  
して、理學博士田丸卓郎一派の謂はゆる  
日本式羅馬字を主張する者も生じたり。  
是が、舊來多年の令狀を整理、編纂せしめ  
し法典。羅馬の文化は、政治法律に於て  
特に長所を示し、終に世界的帝國の理想  
を實現するに至りし國なるより、この法  
典は、現今の歐米各國、殊に獨逸の私法の

る所多きが故に、又、これと關係あり。ヨハネは、はるかう羅馬法王【名】『英Popes』羅馬教の最高の職に在る人。使徒ペテロ(Peter)の衣鉢を繼ぐもの。もと西都教会の大長正となり、又、一面には、西都教会の大長老となり、更に他の一面に於ては、全教會の元首として仰がれ、昔は政治上にも權力を振ひしが、今は單に宗教上の首長たるに止まり、西暦一三七七年以來、バチカノ(Vaticano)宮に住し、各國に使節を駐在せしむ。法王。

ろおまははわらーちやう 羅馬法王廳【名】羅馬法王の部下の執務を統理する廳舎。法王廳。法廳。

ろおまんじゆぎ 浪漫主義【名】「文・美」やまんじゆぎ(浪漫主義)に同じ。

ろおまんす【名】「文・美」の訛。羅馬法王の部下の執務を統理する廳舎。

ろおまんちこずむ【名】「文・美」やまんちこずむ(浪漫的)に同じ。

ろおまんちく【名】「文・美」やまんちく(浪漫的)に同じ。

ろおまんちくじゆぎ 浪漫的主義【名】「文・美」やまんちくじゆぎ(浪漫的主義)に同じ。

ろおまんは 浪漫派【名】「文・美」前條に同じ。

ろおむ 壟壙(英Loun)【名】「地」砂の混じてある粘土。乾燥する時は、碎けて粉となり、風に吹き去られ易し。耕作上、又、播種上、壤土に劣れども、肥料の吸収力は、大なり。温氣を吸收すること遲がり、故に、促成栽培等には不適當なり。東京の赤土(アゼ)、支那の黃土(ハツト)など、これに屬す。もと火山灰の堆積層爛て成れるものといふ。噴壙土。泡沸石土。火山灰土。

ろおん【英Loun】【名】「商」かしつけ(貸附)同に同じ。

ろおんて【名】庭球【名】ろおんて(庭球)。

ろおらあ【英Boiler】【名】ろおらあ(同)。

ろおらあすけえど【英Boiler skating】【名】四箇の小車輪を取り附けたる一種の靴を穿きて、床上を滑走する遊戯。

ろおる（英Roll）【名】圓筒形の回轉體。兩端に軸部ありて、その圓筒體を、他物の面に回轉せしめつゝ、これを壓すためのは、修路機ともいひ、圓筒形部に大なる石材を修用ひ、印刷用のは、肉棒又はルラともいひ、輪とグリセリンとの混合剤を用ひ、インキを板上にて練りこなし、これを直接に版面に附せしむる用をなし。その他製紙織物等の艶出（せきしゆつ）に用ふるもの、金屬板を彎曲せしむるに用ふるものの、鑽石穀類などを粉碎するに用ふるもの等、用途に從ひて、材質、形狀等、異なり。

ろおるがみ ロオル紙【名】次條に同じ。

ろおるばんし ロオル半紙【名】亞硫酸木纖維を材料とし、單圓筒式抄紙機によりて抄造したる粗質の洋紙。抄紙機が單圓筒式なるため、これに接觸する片面のみ平滑となりて、光澤を帶び、他面は粗糙のままである。主として、獨逸より輸入し、我國にても製造す。元來、雜貨被包用のものなれども、我國にては、半紙にも代用す。ろおるがみ。なまりがみ。擬日本紙。

ろおるふじるむ ロオル-film【名】ふじる。

ろおれらい（獨Die Loreley）【名】獨逸と佛蘭西との境を流れるライン（Rhine）河の中にある巖女神ありて、夜間巖頭に妙音を發して歌ひしを、通航の舟士、近寄りて聞かんとせし時、俄かに波荒れ、舟と人と共に没し去りて、痕を留めざりきといふ傳説あり。

ろおれる老列兒（英Laurel）【名】「植」ばかりじゅ（月桂樹）に同じ。

ろおれるえふ 老列兒葉（獨Laurelblatt）【名】亞細亞の西部に自生し、歐羅巴の温帶地方に栽培する薔薇科に屬する灌木の葉を、薬用に供する時の稱。味は弱き收斂性と微かなる苦味とを有し、主として、ロオレル水製造の原料とす。

き、水を加へて蒸潤し、揮発油を加へ、更に本剤として苦扁桃水に代用す。

ろか 舟子の謡ふ歌。ふなうた。欵乃。

ろか 蘆葦笛【名】そとき(蘆笛)と同じ。箇笛。

ろか 蘆芽、蘆牙【名】蘆(アシ)の若芽。蘆筍。

ろか 露芽【名】茶の若芽。

ろかい 艦權、櫓權【名】艦と權と。  
艦權の立たぬ海は無し「句」いかなる事なりとも、これに處する方法に苦しむことは無き譬。〔諺語〕

艦權の無い「句」たよる所なし。よるべなし。「上總國の方言」

ろかいのはり 艦權張【名】和船にて左右の臺の間の櫓の立たざる所の板張。膳櫓。

ろから 魯稿【名】古・支那の魯の國に產生せし、薄く細くなる白絹。「強弩の末は魯縞を穿つ能はず」参照。

ろから 路考茶【名】『俳優瀬川路考』の好によりて流行せしよりいふ』徳川時代に、一時流行せし、一種の櫛。考は馬を追ふ所。

ろからうぢや 路考茶【名】『俳優瀬川路考』の好によりて流行せしよりいふ』うちひすちや(蒼茶)に同じ。『浮世風呂』路考茶をね、から著にしては、今、の鼠や路考茶は近頃の物』

ろからうまけ 路考鬚【名】『俳優瀬川路考』の好によりて流行せしよりいふ』徳川時代に、一時流行せし、一種の鬚。

ろかうむすび 路考結【名】『俳優瀬川路考』の好によりて流行せしよりいふ』女の帯の結び方の一。

ろかく 蘆角【名】『ろとき(蘆笛)に同じ。

を玉の浦 ろれるりら 上ゆや もめんむみま ほへふ・ひは のねねにば とでつちた そせすしづ こけくきか おえりいあ



くかく

いふ 姓氏の一。近江源氏佐佐木氏より出づ。佐佐木泰綱(定綱)の孫、京極氏の祖氏信の兄の孫時信を祖とし、その六世の孫高頼、高頼の孫義賢。室町時代の武将として著る。

ろくかく鹿角【名】■鹿の角。■熊手の類にて、昔、戦争などに、物に引き掛けたり。引き寄するに用ひし物。鹿の角の形に分岐せる鐵に、柄を取り附けたるものなべし。

ろくかくいなづま 六角稻妻【名】紋所の一。稻妻を、六角形に描けるもの。

ろくかくいんこばん 六角極印小判【名】古甲州金の一。表面に上・下二つの六角の極印ありて、上方の中に桐、下方の中に菊あり。裏面には、極印なし。

ろくかくけい 六角形【名】■ろくかく(六角)に同じ。■「數」英 Hexagon】六箇の直線にて囲まれた平面形。六邊形。

ろくかくいんこばん 六角極印小判【名】古甲州金の一。表面に上・下二つの六角の極印ありて、上方の中に桐、下方の中に菊あり。裏面には、極印なし。

ろくかくさい 鹿角砲【名】ろくさい(鹿砲)に同じ。

ろくかくさい 鹿角菜【名】「植」ふのり

ろくかくさい 六角錠【名】紋所の一。六角の竹の内に、錠の葉九枚を描けるもの。

ろくかくさい 鹿角芝【名】「植」かうたけ(香草)の漢名なるべし。

ろくかくたら 鹿角湯【名】徳川時代の、

ろくかくだら 六角堂【名】■六角形に

ろくかくじ 鹿角芝【名】「植」かうたけ(香草)の漢名なるべし。

ろくかくたら 鹿角湯【名】徳川時代の、

ろくかくたら 六角堂【名】徳川時代の、

ろくかくたら 六角通【名】京都下京區六角通、東洞院(東洞院)西に入る、堂前(堂前)町にある頂法寺の俗稱。本尊は如意輪觀音。西國巡禮第十八番の札所。天台宗にして、比叡山延暦寺に屬す。堂後に池坊あり。いの

ろくかせん 六歌仙【名】「人」■平安朝の初期に於ける六人の歌の名人、即ち在原業平、僧正遍照、喜撰法師、大伴黑毛、文

屋(つ)康秀、小野小町の通稱。古今和歌

集の序文に列舉せる人人なるより、後世、

くかく

この稱を生ず。ちゅうごくかせん(中古六

歌仙・しんろくかせん(新六歌仙)参照。■

松永貞徳が京都の大佛殿の南に住ひし

時、園内に報恩藏を造り、その藏の外に描

きし、六人の古人、即ち上官太子、達磨大

師、柿本人丸、紀貫之、紫式部、藤原定家。

ろくかふ 六合【名】りくがふ(六合)に

同じ。■「數」英 Hexagon】六箇

の直線にて圍まれた平面形。六邊形。

ろくかふさん 六甲山【名】「地」六甲山の別稱。

ろくかん 肋間【名】肋骨と肋骨との間。

ろくかんきん 肋間筋【名】「醫」羅

Musculi intercostales】肋骨の間を斜に連絡する、内外二層の筋肉、その二層は、互に交叉して、殆ど九十度の角度を交互に伸縮して、外層のものは、肋骨を挙上して、吸息運動を助け、内層のものは、これを下降せしめて、呼息運動を助く。

ろくかんじんけいとう 肋間神經痛【名】「醫」獨 Interkostalneuritis】肋骨に存

在する神經の、感冒、外傷、中毒などに侵され、疼痛を發する病。

ろくかんじんけいとう 肋間神經痛【名】

くかく

ろくぎやう 六行【名】「佛」ろくはらみつ

て生ずる六つの境界、即ち色(色)境・聲

(音)境・香境・味境・觸(触)境法境・六塵

六賊。【六波羅蜜】に同じ。

ろくぎやう 六行【名】「佛」ろくはらみつ

に同じ。諸曲(皇帝)「六宮の玉階」

ろくぐわんさん 六甲山【名】「地」六甲山

は、もと武庫と同音の字として用ひを、後世音讀するに至りしなり】攝津國武庫

五山の別稱。

ろくかん 肋間筋【名】肋骨と肋骨との間。

ろくかんきん 肋間筋【名】「醫」羅

Musculi intercostales】肋骨の間を斜に連絡する、内外二層の筋肉、その二層は、互に交叉して、殆ど九十度の角度を交互に伸縮して、外層のものは、肋骨を挙上して、吸息運動を助け、内層のものは、これを下降せしめて、呼息運動を助く。

ろくかんじんけいとう 肋間神經痛【名】

ものなるより、特にいふ

ろくぐわつゑ 六月會【名】みばつきゑ(六月會)に同じ。

ろくぐわん むんわん むんわん 六月會【名】室町

幕府の武士從軍の制として、凡そ六町の田地より騎馬一匹、兵卒十五人を出さしめこと。

ろくぐわん むんわん むんわん 六月會【名】

は、親の字の韻に引かれて、ノンと發音す

六種の觀音、即ち千手觀音・聖(聖)觀音・馬頭觀音・十一面觀音・准胝(准胝)觀音・如意輪觀音。一に又、大慈悲觀音・大慈

觀音・師子無畏(無畏)觀音・大光普照觀音・天

人丈夫觀音・大梵深遠(梵)觀音。共に、順利の現れ、地獄・餓鬼・畜生・修羅(修羅)・人

畜・馬頭觀音・十一面觀音・准胝(准胝)觀音・如意輪觀音。又、如意輪觀音を除きて、不空羈索(不空羈索)・觀音・加牟る說もあり。然六觀音・不動

尊・藥師佛

と説けるによりていふ「びやくざう(白象)に同じ。盛衰記」六牙の白象に乘じて……普賢大士の化現(化現)といふ

事、疑無し」太平記「一頭六牙の白象、蓮花(蓮花)を生じ、一一の花の上に、各、七寶の蓮花(蓮花)を生じ、一一の花の上に、各、七人の玉女あり

と説ける。後に到著せし二百五十餘篇の稱。

ろくげ 六牙の白象【句】「佛」六本の牙あり象に同じ。盛衰記「六牙の白象に乘じて……普賢大士の化現(化現)といふ

事、疑無し」太平記「一頭六牙の白象、蓮花(蓮花)を生じ、一一の花の上に、各、七人の玉女あり

と説ける。後に到著せし二百五十餘篇の稱。

ろくげ 錄外【名】「書」日蓮宗にて、宗祖

日蓮の遺書の内、錄内を結集(結集)したる

空より下る。「一牙の上に、各、七寶の

空中より下る。一牙の上に、各、七寶の

えいあ

ねねに

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

濃屋春木屋伊左衛門・河内屋勘兵衛と呼ぶ六軒の娘模あり。寶曆の頃にも二三軒残り居たりといふ。重井篤月は、早、渡初(ハタ)して、中橋や六軒町のさよ格子、唐土(カ)の聖(ハ)の宣はく、色の徳には隣あり、向(カ)兩側輝かす、軒の燈火」  
六國史【名】「書」りくごくし  
(六國史)に同じ。

ろくごくつ 肋骨【名】■「動」脊椎動物の

胸椎一箇ごとに一對づつ帶び、兩棲類以外に在りては、相平行して、胸部に向ひ、弓形に彎曲して、胸廓の側壁をなす棒状の骨。兩棲類にありては、纏かに小突起をなせるのみ。その數は、動物の種類によりて胸椎の數に小異あるが故に、一定せざれども哺乳類にありては、十二三對、その中、人類のは十二對にして、上部の七對は、肋軟骨の媒介によりて胸骨に接続し、次の三對は、その助軟骨を以て、左右の肋軟骨に接続す。前者を眞肋骨、後者を假肋骨と呼ぶ。又、下の二對は、肋骨・肋軟骨共に短くして、腹筋中に終れるが故に、末端すべて浮遊す。あらばね。わきばね。■陸軍の舊制に依る軍服の上衣の胸部に、横に平行線状に存せし紐飾。

■英 Frame 西洋形船にて、龍骨の左右に、上方へ向け、縱に相平行せしめ、やや内方に彎曲せしめて取り附け、船體の横面に、強力を附與する用をなせる構材、即ち船の各外板の方向と直角をなして、その内面に接せるもの。これに用ふる木材又は鐵材を、肋材といふ。

ろくごくつきよぎん 肋骨學筋【名】「醫」

助骨を擧上して、吸氣の作用を助くる筋肉。すべて十一對あり。

ろくごん 六根【名】「佛」根は能生の義、六塵を受けて、六識の原因となる所、即ち眼・耳・鼻・舌・身・意の總稱。前の五根は、謂はゆる五官にして、四大の假合(カ)によりて生ずる肉體、意根のみは、精神にして、小乘にては、後念の識を生ぜしむる末那(ハ)識を意根とす。六識。ろくごん(六

根)の意とす。大乘にては、第七

六齋の日【句】「六齋の日(六齋)」に

同じ。榮花六十餘國の殺生を、六齋の

靈界に參照。

ろくさく 肋材【名】「英 Frame-timber」

と釋して、六根の内、耳根をもて本とす

六根罪障【句】「佛」凡夫の、六根ある

がために、これを悪用して、諸の迷惑を

喚發し、增長して、罪障を作ること。太

平記「六根罪障の我等」

六根懺悔【句】「佛」既往の六根の造

罪を懺悔し、耳に惡聲を聽かず、目に惡

物を見ざる等、六根に六塵を受けぬや

うにすること。榮花頓首して聞けば、

六根懺悔のわたりなりけり」

六根自在【句】「佛」六根の罪障消滅

し、穢濁(ヨガ)を遠離(ヨン)して、六根の力

用無礙(ム)自在なること。當流小罪判官

「本心誠を備へては、六根自在の妙あ

りて」

六根淨【句】「佛」次條の略。

寫の上人は、法華讀誦の功積りて、六根

淨の人なりけり」

六根清淨【句】「佛」六根の執著(ハハ)

を斷ちて、無礙(ム)の妙用を發揮するに

至ること。靈山に登る者、寒參(カツ)す

る者など、この語を唱ふ。榮花明かな

る眼(ハ)を開き、六根清淨を得たりと

覺え」

ろくごん 六言【名】「文」文體明辨に

「按、六言詩、昉於漢司農谷永」とあり」

六字を以て一句とする詩。

ろくさく 六座【名】辨官の、左、右各、大、

中、少の三等に分れたりしもの總稱。は

き(八座)参照。

ろくさい 鹿砦鹿寨【名】さかもぎ(茂茂)

じ。和名雙六子。一名、六采

ろくさい 六齋【名】「ろくさいにち(六齋)

日)の略。■物事を行ふに、一箇月の内

に、一・六・二・七・三・八の日など、豫め日數

六日を定めおくこと。又、二齋・八齋・十二

齋などいふもあり。類推すべし。「六才」

曰くさい(六齋)の略。

ろくさう 勤草【名】「植」むぐら(蘿)の漢

書

に止めさせ給ふ。よき事をば勧め、

悪しき事を止めさせ給ふ」

に同じ。

ろくさう 緑藻【名】「植」りくさう(綠藻)

■英 Algae 又は水草の総稱。

ろくさう 緑衫【名】ろうさう(綠衫)に同

稱。西鶴關越すや六藏がひく朝霞」

山)を見よ。平治史思明に殺され、程

なく祿山が跡絶えぬ」平家梁の周伊、唐

の祿山」

ろくさう 箖子【名】竹を編みて造りたる

事。斎戒すべき六度の日。即ち、陰曆の八日。

十四日十五日二十三日二十九日晦日。

劫初(ハタ)に、外道(ハ)の行(ハ)を修する

者、十二年の間、この日に於て、身内を割

き、血を出し、火に燃やして、護摩を修し、程

子を得んことを祈りため、火中より惡

鬼生じたりとの傳說あるに依り、この日

を惡鬼力を得て、人を伺ふ日なりとして

事を慎み、斎戒すといふ。六齋・六施

日。水籠聖德太子……よろづの經論を

開き見たまひつつ、六齋日は、梵天・帝釋

(ハタ)、下界に下り、たまひて、善惡をただ

したまへる日なりと、物の命を殺す事を止

めたまへと申したまひしかば」

ろくさうねんぶ 六齋念佛【名】次條

を見よ。空也繪譜傳「毎月齋念佛(ハタ)にて、太

六齊念佛」とひ傳へたり」

六齋念佛と云ひ、念佛唱へ……俗呼ひて、

六齋念佛とぞりり六齋踊【名】京都にて

行はるる、一種の踊。もと、空也上人の、

布教のために、毎月六齋に勤行せし念佛

(ハタ)、斎念佛又は空也念佛といふに起因

し空也、尾明神の警告に接してこれを

始めたりといふによりて、空也の歿後、村

人その社前に會してこれを行ひしもの、

次第に流傳して、六齋日以外にも行ひ、笛

などの樂器も加はり、その曲も、もと「猿

まはし」と「獅子」とのみなりしが、後には

「八島」晒(ハタ)、「玉川」、「蘆田川」など、古

き謡物より脱胎し、遂に、「猿まはし」に

は、猿を出し、「獅子」の曲には、獅子舞を

演じ、能樂・狂言などより轉作するに至り

しもの、數曲あり、太鼓の曲譜(ハタ)三味

線の曲譜などさへ加はりて、漸次、俗に授

するに至り、京都近郷十數箇村に亘りて、

三十有餘の會員ありといひ、毎年、孟蘭盆(ハタ)には、六所の地藏を巡詣して行ふ

風習をなせり。

ろくさう 勤草【名】「植」むぐら(蘿)の漢

書

に止めさせ給ふ。よき事をば勧め、

悪しき事を止めさせ給ふ」

に同じ。

ろくさう 緑藻【名】「植」りくさう(綠藻)

■英 Algae 又は水草の總稱。

ろくさう 緑衫【名】ろうさう(綠衫)に同

稱。西鶴關越すや六藏がひく朝霞」

山)を見よ。平治史思明に殺され、程

なく祿山が跡絶えぬ」平家梁の周伊、唐

の祿山」

ろくさう 箖子【名】竹を編みて造りたる

事。斎戒すべき六度の日。即ち、陰曆の八日。

十四日十五日二十三日二十九日晦日。

劫初(ハタ)に、外道(ハ)の行(ハ)を修する

者、十二年の間、この日に於て、身内を割

き、血を出し、火に燃やして、護摩を修し、程

子を得んことを祈りため、火中より惡

鬼生じたりとの傳說あるに依り、この日

を惡鬼力を得て、人を伺ふ日なりとして

事を慎み、斎戒すといふ。六齋・六施

日。水籠聖德太子……よろづの經論を

開き見たまひつつ、六齋日は、梵天・帝釋

(ハタ)、下界に下り、たまひて、善惡をただ

したまへる日なりと、物の命を殺す事を止

めたまへと申したまひしかば」

ろくさうねんぶ 六齋念佛【名】次條

を見よ。空也繪譜傳「毎月齋念佛(ハタ)にて、太

一軍の少主典。兵士一萬人ごとに四

人を置き、軍中の雜務の監察を掌りしも

の。遣唐使の下役。■古公事(ハタ)の

宴の時、侍從の座に、酒を勧めに行きし

人を置き、軍中の雜務の監察を掌りしも

の。陸軍法官部海軍省司法局に屬し、上官の

命を承けて、事務に從事する外、軍法會議

を構成する一員として、法廷に立ち會ひ、

調書の作成、訊問・供述の記録など、ほぼ

通常裁判所の裁判所書記と同一なる事を

掌る判任官。陸軍軍法會議の前身たる陸

軍裁判所にも置かれ、大・中・少の三等に

分れるたり。■宮内省御歌所の職員の

一。定員六人。所長・主事の下にありて、

庶務に從事する判任官。

ろくじ 六時【名】印度にて、古來、一

年を六分したる漸熱(正月十六日より三

月十五日まで)・盛熱(三月十六日より五

月十五日まで)・雨時(五月十六日より七

月十五日まで)・茂時(七月十六日より九

月十五日まで)・漸寒(九月十六日より十

月十五日まで)・盛寒(十一月十六日より一

月十五日まで)の六期。■「佛」とあ

リ正月十五日までの六期。■「佛」とあ

リ陀羅經に「晝夜六時而雨ニ曼陀羅華」とあ

リ陀羅經に「晝夜六時而雨ニ曼陀羅華」とあ</



ろくじんどう 六震動【名】「佛」  
馬の足音、六震動の如し」  
ろくじゆ 文殊【名】「佛」  
六字法印(六字法)【同】  
ろくじや 錄寫【名】書きうつすこと。う  
つし取ること。  
ろくじや 鹿車【名】■鹿に牽かする、小  
き乗用の車。 ■「佛」さんじや(三車)■を  
見よ。  
ろくじや 六蛇【名】ろくじや(六蛇目)  
銅の、濕氣に遭ひて生ずる、綠色の錆。成  
分は鹽基性の炭酸銅にて、炭酸銅と酸化  
銅とが種種の割合に化合せるもの。その  
天然産のものは、孔雀石などあり、岩  
(=)綠青と呼ぶ。有毒にして、綠色の繪具  
に用ふ。でいろく。どうせい。びやくい  
(白綠)参照。和名綠青。一名碧青。綠  
省】 ■ろくじやう(綠青色)の略。空穂  
〔紺青(コウシ)ろくじやうの玉〕  
ろくじやう 六情【名】りくじやう(六情)に  
同じ。  
ろくじやう 祿青色【名】綠青のに  
「似たる色。」  
ろくじやう 六成就【名】「佛」諸經  
の發端に「如是我聞、一時佛在耆闘崛山、  
與大比丘衆萬二千人俱」などとありて、  
信聞時、主・處・衆を顯はす六事。この六  
事和合して、佛の說法成り立つなり。「如  
是」は信成就、「我聞」は聞成就、「一時」は  
時成就、「佛」は主成就、「在耆闘崛山」の類  
は處成就、「與大比丘衆萬二千人與」の類  
は衆成就なり。  
ろくじやく 六尺【名】■「力者(シヨク)」の  
訛といふ貴人の駕籠を弃く者。輪夫。  
をなんこうしやく(女六尺)参照。【陸尺】五  
人畜十五六にはなるまじき娘、……、下女  
あまた、六尺供を固め」 ■「あそ(物を)  
云ふ。〔九州の方言〕 ■酒を造る大なる  
補。「灑酌」〔關東の方言〕 四酒を造る職

人。「灑酌」西國の方言  
ろくじやく祿爵【名】俸祿と爵位と。  
ろくじやくおひ六尺帶【名】二重または  
しの兵兒帶<sup>(ヒヨ)</sup>、即ち三尺帶の二倍の長  
さなるもの。

六種の震動「句」[佛]ろくしんどう  
〔六種震動〕に同じ。諸曲(第六天)「俄か  
に、大空冴えかへり、風雨雷電、肝を消  
し、六種の震動夥しや」

ろくじゆどう 六種動【名】「佛」ろくじゆ  
しんざう(六種運動)に同じ。

府の職制の一。賄方(アガフ)などの六尺を取  
りしゃりしもの。  
**ろくじやくぎふまい** 六尺給米【名】三  
役(エイジ)の。江戸幕府にて、その臺所な  
どにて召し使ふ六尺に給する扶持米を、  
高百石につき米二斗の割合にて、百姓よ  
リ金納又は米納せしめし小物成(コモリ)。  
**ろくじやくそで** 六尺袖【名】『延寶・天  
和の頃までは、大振袖の長さは「一尺五寸  
にて、左・右・前後と四つ合はすれば、六尺  
となるより、ふとぞ』おほぶりそて(大振  
袖)に同じ。

ろぐにゅ 緑珠【名】「人」りょくにゅ(緑珠)  
に同じ。唐物語「綠珠と聞ゆる舞姫なん、  
數多の中に勝れたりければ」  
ろくじゅう 六宗【名】「佛」■佛教の中、  
奈良朝時代にありし華嚴(法華)、律、三論、  
法相、成實(智顗)・俱含(智顕)の六つの宗派。  
南都の六宗といふ。■前項の六宗派より成實と俱含とを除き、平安朝の天台真言を加へたるもの。大乘の六宗といふ。  
ろくじゅ さん 漢酒巾【名】支那晉の陶  
淵明が、酒の熟することに、頭上の角巾を  
取りて、酒を漉(3)したりといふ故事につ  
きていふ語。  
ろくじゅく 六種供具【名】「佛」密宗  
にて常用する、華塗香(カツラ)・水・燒香・飯食  
(ボシ)・燈明の、六種の供具(ボフジ)。  
ろくじゅくひんどう 六種震動【名】「佛」  
大地の六種に震動せりといふ瑞相。八相  
中の後の六相、即ち入胎・出胎・出家・成道  
(ダカツヤ)・轉法輪・入滅の時に震動せりとい  
ふもの。釋迦が、世界を感動せしめ、惡魔  
を憚伏せしめるがために、神通力(シャンコン)を  
以て、三千大千世界を、六方に震動せしめ  
たりといふもの、又、佛說法の時、動・起・  
踊震・吼擊(新譯には動・涌・震擊・吼・爆)  
の六相(前の三相は形につきていひ、後の  
三相は聲につきていふ)に震動せりとい  
ふものの三種あり。六種動。六震動。六  
震。

時、王卿以下に賜ふ福を、大藏（クオトヨリ）鐵出し來りて積み置きし場所。建武年中行事  
「祿法を大辨に賜（シ）ぶ。宣命果てて、群臣（クニ）祿所に向ふ」

ろくじよ六處【名】〔佛〕六根は識（キ）を生ずる依處（シ）なるより處といふ。十ニ因縁の一。母の胎内に在りて、六根具足して、母胎を出づる位。

ろくじよ鹿茸（名）〔鹿〕鹿の袋角（カツカ）。一説に、鹿の胃の肉の干したるものと。徒然草茸を鼻にあって騒ぐべからず。小き蟲ありて、鼻より入りて、脳を食むといへり。■酒に浸して食ふに、始は形色、前項の鹿茸に似たるに因る名といへど、六條と發音似たるより、洒落て書けるなりべし。■さくてうざぎよ（六條豆腐）に同じ。

ろくじようすじ 六勝寺【名】〔寺號〕何れも、勝の字を帶びたるよりいふ。昔、京都の北白河の地に、自河天皇より近衛天皇までの代代の天皇、及び、鳥羽天皇の中宮特賢門院の建立せし法勝寺・尊勝寺・成勝寺・延勝寺・最勝寺・圓勝寺の六寺の總稱。何れも勅願寺にして、或は天台宗に屬し、或は真言宗に屬し、仁和寺の法親王を六勝寺總檢校とし、次に別當・權別當を置かれたり。■

ろくじよのみや 六所宮【名】〔佛〕支那唐の善導の往生禮讃中の、六時（シ）に阿彌陀を禮讃する意の偈語（ギョウ）。■善導の往生禮讃に説く所に依りて、念佛の行者が、六時（シ）に、阿彌陀佛を禮拜、讚嘆すること。第一時は日没、十二光佛

を立てる所 ろれるりら よゆや もめんむみ幸 ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすし幸 こけくきか わえらいあ

の名を唱へて十九拜し、第二時は、初夜、善導大師の大無量壽經に本づきて作れる禮讚偈(ラクジョ)を唱へて二十四拜し、第三時は、中夜、龍樹菩薩の禮讚偈によりて十六拜し、第四時は、後夜、天親菩薩の禮讚偈によりて二十拜し、第五時は、晨朝、彦琮法師の禮讚偈によりて二十一拜し、第六時は善導大師の觀無量壽經に本づきて作れる禮讚偈によりて二十拜すること。徒然「六時禮讚は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて造りて勸めしなり」ろくす錄す「動佐健他」書きしるす。  
記録す。曰取りまとむ。統ぶ。  
ろくす 勸す「動佐健他」おさふ。抑制す。制御す。曰をさめととのぶ。ひきまとむ。統御す。「兵を勒す」曰文字などを彫る。刻む。正統聖根元を知らざれば、みだりがはしき端ともなりぬべし。その弊を救はんために、聊か勒しはべり。  
……、神皇正統記とや名づけはべるべき」  
**四 勒韻(レジン)**をなす。  
ろくすみ 陸墨「名」水平を檢するために打つ墨綱(モクヤハ)。ろくみ(陸水)参照。  
ろくすみ 六瑞「名」[佛]「法華(ハツ)」の六瑞を見よ。「池」に同じ。  
ろくすみち 漢水池「名」ろくすみち濾過ろくすみたい 漤水袋「名」次條に同じ。  
ろくすみぬら 漤水囊「名」水を漉(ス)して、蟲を去る用ふる囊(ハツ)。佛教にては、比丘(ビチ)の六物(ロクモノ)の一とし、律宗にては、この語を用ふれど、禪宗にては、濾水囊といふ。  
**ろくせい** 祿制「名」祿(リ)に關する制度。  
ろくせひ 六正刑「名」武家時代に於ける六種の正刑、即ち禁獄・追放・流罪、斬罪・梶首(カツコ)、「齊日」に同じ。  
ろくせひ 六施日「名」ろくせひにち六ろくせん 六線「名」「數」英 Six Lines 三角函數の六種、即ち正弦・餘弦・正切・餘切・正割・餘割。昔は、これに正矢・餘矢を加へて、八線と呼びたり。各條を見よ。  
ろくそ 六祖「名」曰「人」禪宗にて、ゑのう慧能の異稱。曰「人」支那天台宗に

わう(斑足王)に同じ。  
ろくそとだいし 六祖大師【名】「人」ろくそ  
(六祖)【口】(三)に同じ。  
ろくそとぼう【名】(陸)に同じ。浮世風  
呂(手前細工)の亭主だから、どうで、  
ろくそとぼうな事は無(え)管だ」  
ろくそんじやう 神存星【名】だいやうせい  
(大熊星)を見よ。  
ろくそんわう 六孫王【名】「人」(經基は  
貞純親王の子にして、貞純親王は清和天  
皇の第六の皇子なるよりいふ)みなもさつ  
ねもさづ(源經基)の異稱。  
ろくそんわうじんじや 六孫王神社【名】  
京都市下京區八條町に鎮座せる神社。祭  
神は源經基にして、天照大神と八幡大神  
とを配祀す。この地もと桃園(とうえん)と呼  
び、經基の邸地にして、薨後廟を營み、應  
和年中、經基の子満仲、社殿を創立す。中  
古の衰頽を経て、元祿中、大通寺の僧、幕  
府に請ひて再造し、爾來その寺域に屬せ  
しを、明治維新に至りて分離す。祠後に  
經基の墳、社の東南隅に貞純親王の祠あ  
り。社傍の小祠に満仲及び五所神社を  
祀る。  
ろくだあみ 六駄綱【名】(神奈川縣地方  
にて、鰯(いわしだ)を漁するに用ふる、八手(いわ  
綱)に似たる綱。)  
ろくたい 緑苔【名】(りよくたい(緑苔)  
に同じ。■浮紋ある織物。壇鏡(ろくた  
いの赤色の狩衣)」  
ろくたい 六體【名】(和歌の六種の體、  
即ち長歌・短歌・旋頭歌(せんとうか)・混本歌・折句(りく)・  
「香冠(こうかん)」) ■(六體)に同じ。  
六體の地藏菩薩【句】(「佛」ろくぢざう  
(六地藏に同じ。摩訶訖(まこけ)七道の辻ごと  
に六體の地藏菩薩を造り奉り)」  
ろくたい 六大【名】(「佛」六大(地・水・火・  
風・空に識(じ)を加へていふ語。六大)  
關係の無礙自在なること。六大は、各  
箇離在する事なく、その一あれば、他  
の五も同時に存在し、全世界中一處と

して、このすべてを具足せざること無きを、異類の無礙といひ、又、六天は、萬象の本體なるが故に、佛陀も、地獄も、六天によりて成れる點に於ては、異なる所なき類を、同類の無礙といふ。〔密教の語〕 太平記「六天無碍の春の花は、胎藏界の理門より出づ」

ろくたい 六代【名】「人」平維盛の長子。  
平家没落の後、僧文覺の請によりて、死を聽され、剃髪して、妙覺と號し、世に三位禪師といふ。文覺不軌を圖るに及び、捕へられて斬らる。年二十六。

ろくたいくく 六大黒【名】「佛像圖彙に見えたれども、出據明かならず」六種の大黒即ち、比丘(?)大黒その本地(?)大摩珠如來の標識たる情形のもの。摩訶迦羅(カガ)大黒(大黒の后)、王子迦羅大黒(大黒の王子)、眞陀大黒(施福の標識として、眞陀尼を持するもの)、夜叉大黒(降魔叉の標識として金剛輪を持つるもの)、摩迦羅大黒(大黒の本體なるものの總稱)。

ろくだいじ 六大師【名】八大師の中、弘法・傳教・慈覺・智證・慈慧圓光の六人。

ろくたう 六盜【名】「佛」ろくぞく(六賊)に同じ。

ろくたう 六黨【名】「和歌の六黨」を見ゆるよりいふ。一切の衆生の善惡の業因(ヤメイ)によりて、その中の何れかに往生するべき地獄餓鬼畜生等羅(エコ)人間・天上の六つの境界。六天。著聞「六道衆生(ヤマツ)のために」■むさし(六指)を云ふ。「和泉國・尾張國・上野國・陸奥國・方言」曰能樂にて、調子・開合拍子・序破急音聲・相應の六つの稱。

六道四生【句】「佛」六道の四生。六趣。四生。太平記「三界流轉(リュウゼン)の間、六道の栖(スズ)を見たまひける間に」

六道能化【句】「佛」二佛の中間なる無佛世界にありて、六道の衆生(ヤマツ)を教

を立てるわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしる こけくきか おえらいあ

化すること。又その菩薩。講曲(愛宕空也)「南無や、地藏大菩薩六道能化にてましませば、迷の衆生を導きたま」

六道の衢(ダラ)【句】「佛」六道に分れゆく道すち。保五・六道の衢にて必ず

参會し奉るべく候」

六道の辻【句】「佛」前條に同じ。講曲(熊野)「六道の辻とかや。げにおそろしや、この道は冥途に通ふものなるを」

六道は目の前【句】六道の中の何れによりて定まる。〔諺語〕

六道輪廻【句】「佛」衆生(ヤシ)が、六道時、三途(サン)の渡錢とて、棺に入る六文の錢。或は、錢形を紙に押して代用するもの。支那にて、昏寓錢とて、夜、錢を城中に埋めて、死者の用と/orする風俗あるれども、六道の名を用ふ。

ろくだうせん【句】六道錢【名】死人を葬る間に、轉輪生死すること。

ろくだか祿高【名】俸祿の額(カ)。

ろくだかせりいこうさい【名】祿高整理公債【名】明治三十八年十一月、嘗て金祿公債證書を交付せし時、全額の給與を受けるか、又は錯誤ありたるを整理する

ために募集せし公債。

ろくたま【副】たまさかに。まれに。〔俚語〕

ろくたん六反【名】つらなかしふね(釣流船)に同じ。

ろくたん六段【名】等の曲の一。

ろくたん六段目【名】『古の淨瑠璃』は、すべて六段にて完結せしよりいぶ。

ろくぢざうめぐり六地藏廻【名】地藏尊を本尊とする六箇寺に參詣すること。

ろくぢざうぬま六地藏沼【名】『地』山寺元は、高西寺とへること。親長卿記資益王記(新井)にも、六地藏めぐり六阿彌陀詔の類。闇田耕筆(洛)東西院村高

城國紀伊郡六地藏村にある沼。周囲二里餘。

ろくぢざうめぐり六地藏廻【名】地藏尊を本尊とする六箇寺に參詣すること。

代代その業を繼ぎて、歌道の門戸を張り、徳川時代には、千種有功(マコト)、この流を奉じたり。保五・大炊助(オホヒヨウ)度弘(ヒヨウ)をば、和泉左衛門尉信兼承つて、六條河原にて斬つてけり」

ろくぢとうがはら六條河原【名】六條通の東端、加茂川に瀕せし所。古、罪人、戦敗者などの斬首は、多く此處にて行はれたり。保五・大炊助(オホヒヨウ)度弘(ヒヨウ)をば、和泉左衛門尉信兼承つて、六條河原にて斬つてけり」

ろくぢとうがはら六條河原【名】六條通の東端、加茂川に瀕せし所。古、罪人、戦

勝者などの斬首は、多く此處にて行はれたり。保五・大炊助(オホヒヨウ)度弘(ヒヨウ)をば、和

ろくぢとうがはら六條河原【名】六條通の東端、加茂川に瀕せし所。古、罪人、戦





ろくはら やう 六波羅様 [名] 六波羅敷、即ち平家一族の人人の風俗。平家「烏帽子の様」より始めて、衣紋の書き様に至るまで何事も六波羅様とだに云ひてしかば、一天四海の人皆これを學ぶ。

ろくはらをつそがじら 六波羅越訴頭 [名] ろくはらひきつけがじら(六波羅引付頭)に同じ。

ろくひ 鹿皮 [名] 鹿の毛皮。

ろくぐひ 艤杙・櫓杭 [名] 左右の各櫓床 (よこと櫓床の左方との上にさし立て、櫓の入子 (いりこ) に合はせて、櫓を受くるためにせられた木) 多くは櫓にて造れども、鐵にて造れるもありて、金輪 (きんりん) といふ。ろへそ。ろぼそ。ろまら。

ろくびやく 六百 [數] 百の六倍。

ろくびやくばん 六百番歌合 [名] 「書」藤原良經 (よしむね) 同兼纂 (くわん) 同有家・同定家・僧顯昭 (そうけんじょう) を左、藤原家房・同経家・同隆信・同信定・僧寂蓮 (そうじるいん) を右とせる歌合六百番を、春 (上・下) 夏・秋 (上下) 冬・戀 (一・二・三・四) 等に分類し、釋阿、これに判 (はん) を加へたるもの。一名左大將家歌合。

ろくびやくひろくがう 六百零六號 [名] 「書」この薬剤發明の際、六百〇六回目の試験にて奏効確實の域に達せしよりいふ』『さるばるさん』に同じ。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『代實錄』六府 [名] 前前曹志・府生・府別各一人。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『書』次條の略。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『代實錄』六府 [名] 前前曹志・府生・府別各一人。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『書』次條の略。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『代實錄』六府 [名] 前前曹志・府生・府別各一人。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『書』次條の略。

ろくぶん 六府 [名] ■ ひよ (六府) に同じ。『代實錄』六府 [名] 前前曹志・府生・府別各一人。

ろくぼう 祿律・解深密 (げきしんみつ) 經・如來出現功德依 (よ) たる六部の經典、即ち大方廣佛華嚴經・解深密經・經・如來出現功德

莊嚴經・阿毗達磨經・楞伽經・密嚴經の總稱。支那唐の慈恩の定めし所に係る。

ろくぶん 六分 [名] 十分の六。半分より少し多くこと。

ろくぶん 六分 [名] 曾我倉稽山鹿一足に矢二筋、祐經太腹 (パク) 本多は草分 (アサ) 六分の膝に候へども

ろくぶん 六分板 [名] 厚さ六分ほど

ろくぶんがさ 六部笠 [名] 六部國などの武者奉行・旗奉行・長持奉行、各二人づつ

ろくぶんがさ 六分船足 [名] 船の吃水を、十分の六にすること。小舟用ぶ。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] ■ 理 (ヨリ) 英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したるもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

ろくぶんがさ 六分儀 [名] 「理」英 (イギリス) 航海術又は測量術にて、二物體の間の角度を測る用ふる器械。圓周三百六十度の六分の一即ち六十度の弧を割し、これに、一箇づつの移動反射鏡・固定反射鏡を裝置したもの。二物體より来る映像を、反射鏡を通じて一點に會合せしむれば、その間の角度を測定するを得。六分圓器。■ 「天」羅 (Sexant) 獅子座の南方にある星座。

無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、六萬九千三百八十四文字を。『生院』に同じ。

ろくまんじ 六萬寺 [名] わろじやうん (往子の採擧 (ひきよ) より始めて、衣紋の書き様に至るまで何事も六波羅様とだに云ひてしかば、一天四海の人皆これを學ぶ) に同じ。

ろくまんつば 六萬坪 [名] 地面積に同じ。

おえ

うい

こか

きき

せせ

さ

た

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

催し別宴。

「に同じ。」

(二十六夜待)の略。

ろくろぎよ 六六魚 [名] 「動」りくりく  
ぎよ(六六魚)に同じ。ろくろくに 陸陸に [副] ろくに(陸に)の  
意を強めたる語。(後世は、下に打消の語  
を伴なふ) 重非箇ろくろくに寝ものがた

りも有れかと

て、自由に伸縮し得といふ妖怪。ぬけく  
び。ろくろくび。飛頭蟹。

ろくろくび。轆轤首 [名] 頸甚ぞ長くし

しむるに用ふる車。ふどぐるま。■ さく  
ろんなどにひきし林園。今のがナレス(Bengal Res.)市の北サルナート(SunnaR)の地。

(轆轤臺)の略。

田農家などにて縄を繰

るに用ふる器械。因まんりき。しやち。

■ 傘の中央にありて骨を集め、開閉せ

しむる方言。■ そろばん(算盤)を云ふ。■ 薩

拾遺鹿野(ガニ)。ごびく(五比丘)参考。

朝日に雪消えて春の光

もまづやみちひく)。「同じ。」

ろくゆ 六喩 [名] 「佛」ろくによ(六如)に

その。鹿苑(ガニ)。

えんぎ(六諭衍義)を見よ。

龍言音聲絆滑(皮膚の細軟滑澤)人相

せ」と呼ぶ船に用ふる一種の舵。

ろくろかな 轆轤鉋 [名] 次條に同じ。

■ 古語) 和名「鉋、路久魯

摩國の方言。

ろくろかち 轆轤舵 鹿慮舵 [名] 「はか

セ」と呼ぶ船に用ふる一種の舵。

ろくろかがな 轆轤鉋 [名] 次條に同じ。

■ 古語) 和名「鉋、路久魯

加奈。轆轤裁刀也。

轆轤裁刀也。



に出だし」**ロ**ごじき(乞食)の異称。  
ろざいだん ロ財團【名】ろくぶらわさい  
だん(ロックフニラア財團)の略。

ろざいぢち 雜駕乳・驪齋乳・遜齋乳【名】  
もひひだち(貢乳)を云ふ。〔西國の方言〕夏  
山雜議「西國にて……小兒の母に乳汁  
なくて、もらひ乳にて育つるを、ろざい乳  
といふ。」

ろざう 弄槍【名】ろうさう(弄槍)と同じ。  
明治八年の頃、支那より渡來す。藝は、大さ  
桐の葉ほどにて、表面滑かに光澤あり。

ろざう 露草【名】「植」の品種。明  
治九年の頃、支那より用ふ。

ろざう 魯桑【名】「植」桑の品種。明  
治八年の頃、支那より渡來す。藝は、大さ  
桐の葉ほどにて、表面滑かに光澤あり。

ろざう 露草【名】「植」かんざう(甘草)に  
同じ。

ろざし 紹刺【名】紹に模様を描き、その  
縫地の目を拾ひて、色線にて刺し縫ひた  
もの。刺繡の類なれども、作り方に特  
異の點あるため、別稱を用ふ。

ろざりにん(英 Resinum)「化」アニリン  
より得る、一種の誘導體。黃綠青色の結  
晶をなし、水に溶くれば、深紅色を呈す。

絹・羊毛及び單寧(ジン)媒染を施せる木綿  
の染料に用ふ。ふくしん、ませんた。

Resinum colours【名】「化」ロザニリ  
ンの色素の總稱。

ろざん 廬山【名】「地」支那江西省萍陽  
道にある山。山中、峰巒洞壑の奇勝に富  
み、又隱士、傑僧等の幽棲せし所として  
名高し。一名、匡山、匡廬。

蘆山の眞面目【句】『蘇東坡の詩に「横  
看成嶺側成峯、遠近高低各不同、不  
識廬山真面目、只緣身在此山中」と

あるに本づく。廬山には、五老、石鐘紫  
霄、凌霄、鐵船等の諸峰聳峙して、これを  
遠望するに、方面に從ひて、山容一定せ  
ぬをいへるなり』あまりに複雑、形大

にして、容易に窺ひ知ること能はざる  
眞相の譬。

ろざんじ 廬山寺【名】京都市上京區廣  
小路上の北之邊(北之邊)町にある天台宗の  
寺。本尊は慈惠大師。境内に、慶光天皇

の御陵、新崇賢門院の御墓、その他、皇族  
の塔など多し。

ろざんじのひみささぎ 廬山寺陵【名】光  
格天皇の御父慶光天皇(開院成仁親王)の  
御陵。前條の廬山寺の境内にあり。

ろざんすみ廬山炭【名】支那の廬山に  
て製する炭。唐船斷今姓龜八代を一か  
らげ、重ねて背負ふ廬山炭』

ろざんりう廬山流【名】「佛」支那の淨  
土教三傳の1。東晉の時慧遠(えん)の廬  
山に白蓮(びやん)社を結び、念佛を修せし  
に起れるもの。慧遠流。

ろざし 露紙【名】ろくわし(瀘過紙)に同じ。  
露積【名】ろせき(露積)を見よ。夫

ろざし 露積【名】ろせき(露積)を見よ。夫

ろじ 路次【名】通行する路。みちす  
ぢ。途次。太平記「路次の行列」狂言(茶壺)  
「路次にて、大御酒(シテ)に食へ醉ひ」

ろざし露地【名】同じ。

ろざし 露積【名】ろせき(露積)を見よ。夫

木あづまちの湯坂を越えて見渡せば  
鹽木流るる早川の水

この歌、路次の記に云ふ。足柄の山は道遠しとて、箱根  
にかかるなりけり』

ろじ 露次【名】ろせき(露積)に同じ。

ろじ 顱鷲鷲鷲鷲鷲鷲鷲鷲鷲鷲鷲鷲  
【名】「動」う(鶴)の漢名。

ろじあ 露西亞・魯西亞【名】「地」ろじや  
(露西亞)を見よ。

ろじう 蘆洲【名】蘆(アシ)の生えたる洲。  
あしはら。

ろじく(英 Logia)【名】ろんり(論理)に同  
じく。

ろじつくりやく 露次作役【名】ろじつ  
く(露地作役)に同じ。「者」に同じ。

ろじのもの 露次者【名】ろじのもの(露地  
の職制の一)。將軍遠行の時、道中の事を  
沙汰する諸奉行の總稱。

ろじやかは 露西亞革・魯西亞革【名】  
露西亞國の特產なる、強烈なる香氣を有  
する、上等鞣革。

ろじやこ 露西亞語・魯西亞語【名】露  
西亞國の言語。露語。

ろじやくじん 露西亞人・魯西亞人【名】  
露西亞國の人。露人。

ろじゆ 魯酒【名】うすきさけ。惡酒。

魯酒薄(アシキ)にて、郡鄙圍まる【句】『莊  
子の胠篋篇に「魯酒薄而郡鄙圍聖人生  
而大盛起」とあり、又、淮南子にも見ゆ  
■支那戰國の世に、楚諸侯を會合せし  
めし時、魯趙の二國より、酒を楚王に  
獻ぜしが、魯の酒は薄く、趙の酒は濃か  
りしより、楚の酒更に酒を趙に求め  
しかど、與へざりしため、吏怨りて、魯  
の酒を趙のなりと奏せし結果、楚王、趙  
の首都郡鄙を圍むに至れりといふ故  
事。太平記「唐堀きて齒寒く、魯酒薄く  
して郡鄙圍まる」

ろじゆふきやう 路次奉行【名】鎌倉幕府  
の職制の一。將軍遠行の時、道中の事を  
沙汰する諸奉行の總稱。

ろじん 路寢【名】天子・諸侯の正殿。正  
亞人(アシナ)の略。

ろじん 路人【名】往来の人。行人。

ろじん 露刃【名】ぬきみ。白刃。

ろじん 露人・魯人【名】ろじやん(露西  
亞人)の略。

ろじんつう 漏盡通【名】「佛」ろくつう(六  
呂衆)「通」を見よ。

ろじんく 露宿【名】戸外に宿ること。の

ろじゆく 露出【名】「風餐・露宿」  
曰「廬・市居曰「舍」とあり」こや。いへ。

矮屋。こと、又、あらはし出すこと。むきだし。

ろじや 磷砂【名】「化」えんくわんもにうむ  
〔靈化安母紐譯〕同じ。

ろじや 露西亞・魯西亞【名】  
〔地〕歐羅巴洲の東北部及び亞細亞に亘る  
國。首府はモスクバ。現時の正式國名、  
社會主義サウエエト共和國聯盟。

ろじやう 路床【名】英 Roadbed】路面  
の下部に位し、道路を爲す鋪料を敷設す  
べき地盤。路盤。

ろじやう 路上【名】みちのうへ。途上。  
ろじやうけういく 路上教育【名】就學  
者の少き貧民窟などに、出張し、その邊の  
者を集めて、路上にて、有益なる話をして  
聞かせる。

ろじやう 路上【名】みちのうへ。途上。  
ろじやうけういく 路上教育【名】就學  
者を集めて、路上にて、有益なる話をして  
聞かせる。

ろじゆつけい 露出計【名】寫眞術にて、  
感光フィルムを日光に曝すこと。

ろじゆん 蘆荀蘆筍【名】ろか(蘆芽)に  
同じ。蘆荀(アシコウ)。

ろじゆつじかん 露出時間【名】寫眞術  
にて、感光フィルムを日光に曝すこと。

おえうらいあ

あさき

あさみ

あさん

あいだ

ろせき 鹵石【名】〔鐵〕鹽素・臭素・汎素の化合せる鐵。例へば、岩鹽など。

ろせん 路錢【名】〔路用〕に同じ。

五瀬(?) 海道にかかるて」 「を見よ。

ろせん 露川【名】〔人〕さはせん(澤露川)に同じ。

ろそう 魁叟【名】〔人〕叟は長老の稱。

じろじ(孔子)の異稱。 「劉季」の漢名。

ろぞく 薩粟【名】〔植〕さだもろこし(砂糖)。

ろそん 呂宋【名】〔地〕るそん(呂宋)に同じ。

ろそん 露臺【名】〔人〕叟は長老の稱。

ろたい 露臺【名】〔屋根なき臺(?)〕。げつだい。 「昔、禁中の紫宸仁壽兩殿の間に、亂舞などを行ふために設けたる床張の、屋根なき場所。つゆのうてな。れ試に内裏の露臺にて行ひし亂舞。」

ろたん 露壇【名】〔佛〕ごまだん(護摩壇)に同じ。 「羅蓋記」露壇に立ちたる劍を抜き」 太平記「露壇の煙にふすぼり、噴患の炎に骨を焦して」 「略。

ろち 鶩池【名】〔地〕びやくち(白鶩池)の露戰役の當時、我軍事の祕密等を探りて、敵に通告せし内外人。

ろち 鶩池【名】〔地〕びやくち(白鶩池)の露戰役の當時、我軍事の祕密等を探りて、敵に通告せし内外人。

ろち 濁池【名】さわち(濁過池)に同じ。

ろち 露地【名】明治三十七八年の日露戰役の當時、我軍事の祕密等を探りて、敵に通告せし内外人。

ろち 露臺の亂舞【句】 古、寅の日の御前の間に、亂舞などを行ふために設けたる床張の、屋根なき場所。つゆのうてな。れ試に内裏の露臺にて行ひし亂舞。

ろち 露壇【名】〔佛〕ごまだん(護摩壇)に同じ。 「羅蓋記」露壇に立ちたる劍を抜き」 太平記「露壇の煙にふすぼり、噴患の炎に骨を焦して」 「略。

ろち 鶩池【名】〔地〕びやくち(白鶩池)の露戰役の當時、我軍事の祕密等を探りて、敵に通告せし内外人。

ろち 露地【名】〔法華經の譬喻品に「諸子等安穩得」出、皆於三衢道中露地而坐」とあり」ちめん。地上。葵花(四種)の露地の中の露地におはしまし歩ませたまひつらん」 南雷別志「露地といふは、屋根と之間の狭き通路。『東京の話』四茶園内又は庭園の通路。例へば、閑中より更に上段の庭又は茶庭などに通ぶ道筋など。『市中の人家と人家との間の狭き通路。』

草かぬ地をいふを、誤りて、庭の事にしたるなり」 『門内又は庭園の通路。例へば、閑中より更に上段の庭又は茶庭などに通ぶ道筋など。』

普通は、中潛(ナカク)を以て、内露地と外露

地とに分つ、後者の方式を取る。

露地の白牛(ハコ)【句】「佛」門外の露地に立てる大白牛車(ハコ)の義。碧巖

錄に「露地白牛、眼草朔、耳卓朔」とあり。法華經警喻品の詞に本「く」さん

しゃ(三車)を見よ。諸曲(車)「露地の白牛を打てて見せんと、拂子(スツ)を上げて、虚空を打てば」

ろちあんどん 露地行燈路地行燈【名】夜咲(ヨクサ)及び曉の茶会などの時待合(ハジ)にある上客の座席の側に置く行燈。

ろちあむ(英 Rhodium)【名】〔化〕金屬元素の一。稀有なるものにて、灰色を帶び、堅硬にして、純粹なるものは、王水にも溶けせず。

ろちあら 露地裏路地裏【名】露地(?)に取り附くることもありて、これを露柱といふ。

ろちあんどん 露地門路地門【名】露地庭の入口にある門。多くは、茅門などなり。又、門の代りに、ただ質素閑雅なる低き戸を、柱に取り附くることもありて、これを露戸といふ。

ろちあんとら 頭頂【名】頭の頂(?)。表面。顱頂溝と後頭葉との間。

ろちやうかん 驢腸羹【名】昔の菓子の一種。羊羹の體なるべし。庭訓往來「點心解せず。

ろちやうえみ 顱頂葉【名】〔動〕大脳の素の一。稀有なるものにて、灰色を帶び、堅硬にして、純粹なるものは、王水にも溶けせず。

ろちやうかん 驢腸羹【名】昔の菓子の一種。羊羹の體なるべし。庭訓往來「點心解せず。

ろちやうかん 驢腸羹【名】〔醫〕頭蓋骨に取り附くることもありて、これを露戸といふ。

ろちやうかん 露地等路地笠【名】露地(?)にて、雨天の時使用する笠。竹の皮にて、三分なるを、法とす。

ろちやうかん 露地口路地口【名】往来の道地(?)の出入に用ふる下駄。杉材にて造り、柱に、この奥に萬物縫(ヨミヒ)仕立屋と、張札をして」

ろちやうかん 露地下駄路地地下駄【名】露地(?)の出入に用ふる下駄。杉材にて造り、柱に、この奥に萬物縫(ヨミヒ)仕立屋と、張札をして」

ろちやうかん 露地口路地口【名】往来の道地(?)の出入に用ふる下駄。杉材にて造り、柱に、この奥に萬物縫(ヨミヒ)仕立屋と、張札をして」

ろちやうかん 露地草履路地草履【名】露地(?)にて用ふる、竹の皮製の裏附草履。

ろちやうかん 露地草履路地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の手入に從事せしもの。露

ろちやうかん 露地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の手入に從事せしもの。露

ろちやうかん 露地庭路地庭【名】露地(?)の露地門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地者【名】江戸幕府の職員に統べられたる露地者。

ろちやうかん 露地戸路地戸【名】ろちもん(露地)の露地戸戸門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地戸【名】ろちもん(露地)の露地戸戸門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の露地戸戸門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の露地戸戸門より腰掛までの間。

西の掃除に用ふる等。棕櫚の葉にて、普通の座敷用のものより小形に造り、柄の長さ三尺六寸。節の七箇なるを法とす。

ろちくあらうと(英 Lockout)【名】ストラ

地に立てる大白牛車(ハコ)の義。碧巖

露地白牛、眼草朔、耳卓朔」とあり。法華經警喻品の詞に本「く」さん

しゃ(三車)を見よ。諸曲(車)「露地の白牛を打てて見せんと、拂子(スツ)を上げて、虚空を打てば」

ろちあんどん 露地行燈路地行燈【名】夜咲(ヨクサ)及び曉の茶会などの時待合(ハジ)における上客の座席の側に置く行燈。

ろちあむ(英 Rhodium)【名】〔化〕金屬元素の一。稀有なるものにて、灰色を帶び、堅硬にして、純粹なるものは、王水にも溶けせず。

ろちあら 露地裏路地裏【名】露地(?)に取り附くることもありて、これを露柱といふ。

ろちあんとら 頭頂【名】頭の頂(?)。表面。顱頂溝と後頭葉との間。

ろちやうかん 驢腸羹【名】昔の菓子の一種。羊羹の體なるべし。庭訓往來「點心解せず。

ろちやうえみ 顱頂葉【名】〔動〕大脳の素の一。稀有なるものにて、灰色を帶び、堅硬にして、純粹なるものは、王水にも溶けせず。

ろちやうかん 驢腸羹【名】昔の菓子の一種。羊羹の體なるべし。庭訓往來「點心解せず。

ろちやうかん 驢腸羹【名】〔醫〕頭蓋骨に取り附くることもありて、これを露戸といふ。

ろちやうかん 露地等路地笠【名】露地(?)にて、雨天の時使用する笠。竹の皮にて、三分なるを、法とす。

ろちやうかん 露地口路地口【名】往来の道地(?)の出入に用ふる下駄。杉材にて造り、柱に、この奥に萬物縫(ヨミヒ)仕立屋と、張札をして」

ろちやうかん 露地下駄路地地下駄【名】露地(?)にて用ふる、竹の皮製の裏附草履。

ろちやうかん 露地草履路地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の手入に從事せしもの。露

ろちやうかん 露地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の手入に從事せしもの。露

ろちやうかん 露地庭路地庭【名】露地(?)の露地門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地者【名】江戸幕府の職員に統べられたる露地者。

ろちやうかん 露地戸路地戸【名】ろちもん(露地)の露地戸戸門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地戸【名】ろちもん(露地)の露地戸戸門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の露地戸戸門より腰掛までの間。

「じ。」

ろづぐ【名】ゑぐに同じ。

ろづく【名】船尖・櫓尖・櫓突【名】前條に同

通の座敷用のものより小形に造り、柄の高さ五丈内外。

ろづくあらうと(英 Lockout)【名】ストラ

地に立てる大白牛車(ハコ)の義。碧巖

露地白牛、眼草朔、耳卓朔」とあり。法華經警喻品の詞に本「く」さん

しゃ(三車)を見よ。諸曲(車)「露地の白牛を打て見せんと、拂子(スツ)を上げて、虚空を打てば」

ろちあんどん 露地行燈路地行燈【名】夜咲(ヨクサ)及び曉の茶会などの時待合(ハジ)における上客の座席の側に置く行燈。

ろちあむ(英 Rhodium)【名】〔化〕金屬元素の一。稀有なるものにて、灰色を帶び、堅硬にして、純粹なるものは、王水にも溶けせず。

ろちあら 露地裏路地裏【名】露地(?)に取り附くることもありて、これを露柱といふ。

ろちあんとら 頭頂【名】頭の頂(?)。表面。顱頂溝と後頭葉との間。

ろちやうかん 驢腸羹【名】昔の菓子の一種。羊羹の體なるべし。庭訓往來「點心解せず。

ろちやうえみ 顱頂葉【名】〔動〕大脳の素の一。稀有なるものにて、灰色を帶び、堅硬にして、純粹なるものは、王水にも溶けせず。

ろちやうかん 驢腸羹【名】昔の菓子の一種。羊羹の體なるべし。庭訓往來「點心解せず。

ろちやうかん 驢腸羹【名】〔醫〕頭蓋骨に取り附くることもありて、これを露戸といふ。

ろちやうかん 露地等路地笠【名】露地(?)にて、雨天の時使用する笠。竹の皮にて、三分なるを、法とす。

ろちやうかん 露地口路地口【名】往来の道地(?)の出入に用ふる下駄。杉材にて造り、柱に、この奥に萬物縫(ヨミヒ)仕立屋と、張札をして」

ろちやうかん 露地下駄路地地下駄【名】露地(?)にて用ふる、竹の皮製の裏附草履。

ろちやうかん 露地草履路地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の手入に從事せしもの。露

ろちやうかん 露地作役【名】江戸幕府の職制の一。數寄屋頭(ガシキ)の屬僚として、露地(?)の手入に從事せしもの。露

ろちやうかん 露地庭路地庭【名】露地(?)の露地門より腰掛までの間。

ろちやうかん 露地者【名】江戸幕府の職員に統べられたる露地者。

「あ

けくきか

おえらいあ

そせすしき

のねねねには

とつちた

るるるわ

るれるりら

よゆや

もめんむみま

ほへふひは

のねねねには

とせす

しき

さ

き

か

か

か

か

か

か

か

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か







